

大学の国際化 最前線

研修通じて専門性深める

新潟医療福祉大学

大洋州から訪れる研修員

近年、食習慣が急速に変化し、肥満や糖尿病などの生活習慣病が拡大している大洋州の国々。こうした国々の保健局で働く職員らが、2009年から毎年訪れる場所がある。新潟市北区にキャンパスを構える新潟医療福祉大学だ。

同大学は、「QOL（生活の質向上）サポーターの育成」を理念に掲げ、2000年の開学以来、保健医療や福祉、栄養学、スポーツ医学などの分野で多くの人材を輩出してきた。そして09年からは、国際協力機構（JICA）から委託を受けて、フィジーをはじめ大洋州の国々から研修生を受け入れ、生活習慣病対策に関するワークショップなどを実施している。



海外研修の様子

研修の受け入れ先として同大学に白羽の矢が立てられた理由について、健康科学部の佐藤大輔講師は、「本学は新潟市などと連携し、地域の生活習慣病対策に長年取り組んできた経験があるため」と語る。もちろん、同学が、かねてより医療実務者を育成する教育機関としては珍しいほど、積極的に国際化を進めてきたということも非常に大きい。

同学は開学以来、「英語等短期研修助成制度」などの支援制度を設け、より多くの学生の海外研修への参加を積極的に後押ししてきた。そうした方針が奏功し、欧米や、東南アジアなどの開発途上国を訪問して現地の福祉団体などで研修やボランティア活動に参加する学生たち

が徐々に増え、12年には120人以上の参加を数えた。さらに、修士課程に在籍する大学院生が、同大学に在籍したまま青年海外協力隊に参加できるプログラムも同年に開始している。

異文化の中で専門性深める

だが、卒業後も海外で活躍している人数は、現時点では決して多いとは言えない。一部の学生が、卒業後に青年海外協力隊に参加する程度だ。そうした中、国際化を進める意義はどこにあるのか。

学生の海外派遣を担当する医療技術学部の古西勇准教授は、「異文化体験は、自らの専門性を深めるのに役立つ」と指摘する。「本学で身に付ける専門知識やスキルが、日本と異なる社会・文化背景においても通用するのか。そうした問題に向き合うことが、

一人一人の能力を高め、ひいては日本の医療の質向上にもつながる」。

アジアの国々で高齢化や介護の在り方が新たな社会問題として顕在化するなど、開発途上国における保健医療や福祉の課題は年々高度化しつつある。そうした中、まずは日本国内における医療や福祉の質向上をしていくことが、結果として世界に貢献できる日本にもつながる。海外向け人材の輩出自体はまだ少なくとも、学生の海外派遣を積極的に進め、そして現在は研修生の受け入れ先として選ばれるようになった同大学の取り組みは、そうした真理を物語っているように思えた。